旭竜学区自然災害の歴史（明治以降）

旭竜学区安全・安心ネットワーク

Ⅰ．水害

発生年月日	原　因	災　害　の　状　況
1892.7.22 明治25年	台　風	総雨量 750 ミリに達する豪雨となり、今在家・東川原・二本松の各堤防決壊、百間川両岸一帯は濁流の海と化す。特に今在家一帯は家屋が多く流失するなど被害甚大。当学区については家屋浸水、田畑冠水などの被害があったと推定されるが、具体的な記録は見当たらない。 **当日の状況について「上道郡水害記録」より抜粋** 「7月22日夜半、暴風雨吹き荒れ河川の水勢激烈を極め、各地の通路は断絶、羅災村民の悲嘆号泣の声四方に起こる。（中略）親は子を救わんとして共に溺れ、夫は妻を助けんとしてその身を失う。云々」
1893.10.14 明治26年	台　風	前年に続く大洪水。市街地は 2 年連続の災害を被る。百間川の水位も 3.3mに達するが幸い堤防の決壊はなく、当地域は前年程の災害には至らず。宇野村全体では（当時、当学区は宇野村に属す）全壊家屋 3 戸、半壊家屋 64 戸、浸水家屋 465 戸の記録あるも、被害は南西部に集中した模様。
1934.9.21 昭和9年 	室戸台風	暴風雨に因る未曾有の大洪水。各河川共堤防の決壊が相次ぐ。百間川も竹田、二本松、原尾島の各堤防が決壊。これにより、その周辺一帯は濁流の中に水没。特に竹田、東川原方面一帯は水位が 3mに達し被害甚大。宇野地区の被害は死者 2 名、家屋流失及び全壊 52 戸、床上浸水 482 戸。中には流失する藁屋根にすがり、大多羅方面まで流された家族もいたとか。（「宇野地区の歴史」より） **この災害時における中島村での逸話** 百間川に押し寄せる濁流から堤防を守るべく、村人総出で警戒していたところ、中島城址から下流 30m 辺の堤防に穴が開き、決壊寸前の危機に陥った。正にその時、奇しくも流れて来た流木の一本がその穴に吸い込まれるように突き刺さった。村人たちはとっさに、筵や畳を流木に掛けて穴を塞ぎ、奇跡的に決壊を免れた。村人は、その流木をその場所に建て、

		桜の木を植えて災害防止の記念樹とした。また、その時流れ着いた流木を岡山市から払い下げを受けたことによって、中島公会堂の建設をすることが出来た。（故梅島茂氏談） ＊談話中の記念樹は風雪に耐え兼ねたか、残念ながら今はその影すら見当たらない。
1998.10.18 平成10年	台風10号	雨台風となり、県北は総雨量 400 ミリ以上の豪雨となった。前夜半から突如旭川ダムを放水した為に、中牧地区を中心に水没被害が続出。百間川は一の荒手を越えた濁流が矢のように流れ、一の荒手上流部が一部決壊するも、当学区においては伏流水が湧き出すなどの現象はあったが、大きな災害には至らず。

Ⅱ. 地震

発生年月日	地震名	震度	被　災　状　況
1909.11.10 明治42年	宮崎県西部	5	県南部において死者2名、建物全半壊6戸の被害があるも、当学区には被害の記録なし。
1946.12.21 昭和21年 	南　海	4	旭川、高梁川下流域の地盤軟弱地域においては甚大な被害発生。県下全体で死者52名、負傷者157名、建物全半壊3546戸に上った。当学区における被災記録は見当たらないが地盤強固な土地柄、被害は軽微であったと推定される。
1995.1.17 平成7年	阪神淡路	4	京阪神地域に甚大な被害をもたらした大震災であったが、当学区での被害報告はない。
2000.10.6 平成12年	鳥取県西部	5	県北及び県南の地盤軟弱地域に被害が集中。県下全体で重傷者5名、建物全半壊38戸など。当学区での被害報告は、特にはなし。

Ⅲ. 津波

1854年、安政南海大地震発生。牛窓で約2mの津波を計測したとか（邑久郡史より）。沿岸地域においては、少なからず被害が出たものと推測される。

明治以降では1946年の南海地震の際、岡山港で0.4mの津波を計測したそうであるが、勿論当学区への影響は無かった。

平成２８年１月作成
この文書は、郷土史家・横山洋一氏に担当していただきました。